

少年愛、やおい、ボーイズラブ

マダドナーめぐみ(ウィーン大学東アジア研究所日本学)

megumi.maderdonner@univie.ac.at

1. はじめに

今日、日本語学習者にマンガの愛読者が増えている。その中でも日本の「やおい」「ボーイズラブ」という言葉を聞くこともあるだろう。

70年代以降、少女マンガに少年を主人公とし、彼らの心の葛藤を中心にした少年の世界、少年愛を描いた作品が登場する。それらの作品はブームを巻き起こし、ホモセクシュアルというテーマを少女マンガにとって重要な、そして当たり前のものとしていく。そこからホモセクシュアルシーンを中心に描いた「やおい」が発展的に生まれ、さらに昨今のBL(ボーイズラブ)マンガへとつながっていく。本稿では、この現象の土台となる70年代80年代の少女マンガに重点的に論じ、そこから派生した「やおい」とBLについて述べる。「やおい」については、以前に共同発表をしたウィーン大学博士課程の猿橋亜希氏の論文をもとにまとめたことをお断りしておく。

2. 美少年、美青年と同性愛

少女マンガにはその誕生時から、主人公は読者と同年代の女の子であるべしという暗黙の規則があった。読者である少女達が、感情移入できるのは女の子以外あり得ないという考えからであった。しかしながら、「24年組」と呼ばれる女性マンガ家たちが、マンガを自分の感じている内的世界を表現し、言いたいことを伝える手段として完成させて行く中で、70年代後半80年代始めにかけて少年を主人公にして、人間関係の葛藤と少年間の愛と性を描いた代表的作品が発表された。ここでは、4作品をとりあげ、その意味を論ずる。

2-1. 『11月のギムナジウム』 - 少年の発見と美少年の意味

1971年に発表された萩尾望都の『11月のギムナジウム』は、ドイツの全寮制の男子校を舞台とした物語である。

この作品は少年愛そのものを扱ったものではなく、実は双子であった2人の少年のお互いに引かれ合う感情、寄宿舎に暮らす少年たちの人間関係や思いを描いている。しかしながら、少年たちがキスをしたり、抱き合ったり、見つめ合ったりする場面があり、後に「やおい」と呼ばれる、少年愛や同性愛を描いたマンガの先駆的作品として位置づけられる。

なぜ主人公が少女でなく、少年なのか。主人公の体は作者が自己愛と夢を表現し、読者が作者のメッセージを読み取り己の自己愛を投影させるシンボルである。主人公が少女の姿を取った時、その愛や感情、行動は作者にとっても読者にとってもよく知っているだけに、生々しく発想に限られる。自由な発想、物語の自由な展開のために、少年の姿形が選り取られた。(柳原 1987) 萩尾望都自身、「少女バージョンも書いたが、あまりにべたっとしすぎた」と言っている。



図1 萩尾望都『11月のギムナジウム』萩尾望都作品集4 1977 小学館

また、当時の少女たちには「男の子は自由だ」という漠然とした思いがあった。男女平等、ウーマンリブが叫ばれてはいたが、まだまだ社会の中で、女としての役割、かなり抑圧された役割を持たされていると感じていた彼女たちには、実際の少年の世界はどうあれ、少年には自由があると思われた。少年を主人公にすることで、自由を獲得し、実際の世界ではありえないかもしれない物語の展開が可能になる。読者はその少年に自己を重ね、新しい世界を手に入れた。

主人公は、女性である作者と少女である読者が自己を投影するシンボル、つまり少女の内面のメタファーであるため、少女の心をもつ美少年でなければならない。そしてそのパートナーはより男らしく、やさしく美しい少年もしくは青年、つまり読者の理想の男性が描かれる。

2-2. 『風と木の詩』-少年愛と性描写

1976年から連載が始まった竹宮恵子の『風と木の詩』には、少女マンガで始めて少年のベッドシーンが描かれた。

19世紀末の南フランスの寄宿舎で出会ったジルベールとセルジュの2少年の愛と葛藤の物語である。セルジュはフランス貴族とジプシーの娘の間に生まれたまっすぐで誇り高い少年である。ジルベールは叔父（実は父親）からホモセクシュアルになるよう育てられ、同性とのセックスなしには生きられない少年となった。叔父から拒まれた寂しさから上級生と寝たり、男娼まがいのこともしている。

竹宮によれば、少女マンガにおいて恋愛を描かなければ成功しないが、彼女自身は男女間の恋愛を描くことには余り興味がなく、苦肉の策として少年愛を描いた。ありきたりの男女関係の枠を取り払って、人間の感情の複雑さを描いたドラマだと言っているが、性の欲望を描いた初めての少女マンガである。

当時の商業少女マンガ誌では、男女間の恋愛で描けるのはせいぜいキスくらいまでで、セックスを描くことはタブーであった。それゆえ、少年同士の欲情、セックスを描いたこの作品はセンセーショナルを引き起こした。

男女間のセックスには妊娠の危険がつきまとい、それを無視した物語は嘘くさい。少年同士のセックスなら、その心配はいらない。読者はジルベールに感情移入するものの、一方で彼が欲望の対象となろうが、男娼まがいのことをしようが、レイプされようが、傍観者として物語を楽しめる。もしジルベールが少女として描かれていたら、もう1人の自分としてあまりに生々すぎるであろう。この作品によって、少女たちは痛みを感じずにセックスシーンを楽しめる手段を手に入れた。



図2 竹宮恵子『風と木の詩』第1巻 1990 角川書店 310ページ

2-3. 『日出処の天子』-拒絶される愛



図3 山岸涼子 『日出処の天子』第5巻 1984 白泉社 222ページ

山岸涼子の『日出処の天子』は1980年から1984年にかけて、雑誌『ララ』に連載された、厩戸皇子、後の聖徳太子の少年青年期を描いた作品である。読者はこの作品によって歴史を学ぶとともに、厩戸皇子と蘇我毛人（歴史上は蝦夷と記さるがこの作品では毛人）の間のホモセクシュアルの雰囲気を楽しんだ。

厩戸皇子は、女性を愛することができない美少年に描かれている。美しく、繊細で読者は感情移入しやすい。彼の毛人に対する感情は女性的で、蝦夷の愛する人に対してまるで女性のように嫉妬する。同時に厩戸皇子は読者にとってのあこがれの男性の役割も担っている。そのため、読者の反感を買わないように物語の中で理想の女性を得ることはできない。

この作品の重要なポイントは拒絶される愛である。男女間の恋を描いた少女マンガでは、少女の主人公が相手の男性に受け入れられハッピーエンドとなるのが約束だが、少年愛もしくはホモセクシュアルマンガは拒絶され、成就しない恋愛を描く。この作品において、毛人が女性であれば、厩戸皇子の恋は婚姻によって成就する。厩戸皇子が女性であれば、毛人が臣下であるという階級の差にもかかわらず、性的関係を持つことは可能だったであろう。毛人が男性で女性を愛することにより、厩戸皇子の愛は拒まれ、それ故に純愛として描

かれる。少女マンガの同性愛は現実の同性愛ではなく、純粋な人間関係と愛情、相互の魂のふれあいを描く一種の道具として機能している。したたかな政治家、天皇家の皇子として優位に立っているが、ひたすら毛人を恋い慕う厩戸皇子のせつなさに、純愛にあこがれる読者は共感する。

2-4. 『摩利と新吾』-対等のパートナー

1977年から1984年にかけて雑誌『ララ』に連載された。幼なじみで「おみきどっくり」と言われるほど仲のよい摩利と新吾の青春と成長を描く。2人は旧制高校に入学し、寄宿舎の仲間と青春を謳歌する。摩利はいつしか新吾への恋愛感情に気がつく。

2人の関係は男女であれば、セックスを含む恋人であろう。しかし、新吾は、真理を運命の相手として認め愛していても、恋人にはならない。新吾は家庭を持ち、摩利は彼を愛している女性と子供を設けるが、2人は死ぬまで堅い友情とセックス抜きで純粋な愛情で結ばれる。

摩利と新吾の関係は同等のパートナーの結びつきである。作者の木原敏江は、愛情の最高峰はプラトニックであると述べている。この作品で「友情とも恋愛ともつかないもの、恋だの友愛だの区別しない所で、一番深い所で結ばれている2人」を描きたかったと言っている。(木原、中島1984)



図4 木原敏江 『摩利と新吾』第13巻 1984 白泉社 105ページ

男女間だと同等は難しく、肉体的に結びついて終わる。同等の人間の葛藤を描くなら少女同士でもいいわけだが、少女である読者には女性同士で摩利と新吾のような関係はありえないと感じられるだろう。自分たちのよく知らない少年の世界でだからこそ、現実にはないであろう運命のパートナーとの永遠の魂の結び付きも想像の余地があった。

初期の少年愛マンガは、作家たちが少年の姿に託して、女性はこうあるべきだという当時の既成観念に疑問を投げかけたものと考えられる。それが潜在的に社会に違和感を感じていた読者たちの共感を得、多くのファンを獲得して行く。この段階では、舞台がいずれも現代日本ではない。西欧だったり古代だったり大正時代だったりする。読者たちの実生活とかけ離れた場所、時代でなければ、ファンタジーの展開が可能ではなかった。

3. 少年愛とやおい

70年代80年代の少年愛マンガの成功により、それ以降の少女マンガでは、美少年や少年愛が当たり前の不可欠の構成要素となっていく。ごく普通の少女と少年との間のラブストーリーであっても、脇役に美少年やホモ青年が出て来るようになる。

初期の少年愛マンガが商業誌で成功したのと、ほぼ同時期に読者たちのあいだで、自ら少年愛マンガを描き、同人誌の形で発表する現象が現れる。1975年にSF、アニメ、マンガの同人誌を非商業ベースで販売するイベントのコミックマーケット（コミケ）が創設され、同人誌が一般に知られるようになる。同人誌では、少年愛の性愛の部分に重点がかった多くの作品が発表された。コミケでの少年愛マンガ人気に目を付け、少年愛は売れると気がついた商業誌が少年愛専門の雑誌を発行する。1978年の『コミック JUNE』（後に『コミック JUN』）である。これらの少年愛マンガを作者自ら自嘲を込めて「やまなし、落ちなし、意味なし」と言った所から、「やおい」という言葉が生まれた。コミケは年々大きくなり、やおいマンガは一般マンガファンにも浸透し、やおいという言葉が少年愛およびホモセクシュアルマンガを指すようになる。

肉体的な愛、拒絶される愛、パートナーとの対等の関係がやおいマンガの主要テーマである。そこに出て来る美少年は作者および読者のもう1人の自分であり、その姿を借りる、つまり美少年の皮を被ってやおいマンガの中のセクシュアルなファンタジーの世界に遊ぶことで、現実の社会の中の女性の地位や、少女あるいは女性が感じる生きにくさ、抑圧から一時的にせよ逃避することができたのである。

4. ボーイズラブ BL

やおいがポピュラーになった90年代以降、「やおい」につきまとうネガティブなイメージを払拭するために、やおいに変わってボーイズラブ（BL）という言葉が使われた。また同時に初めからやおいを読んで育った世代が、つまり前世代の女性としての社会での葛藤の結果としての少年愛漫画を知らない世代が作家として登場し始める。彼女らは、同性愛は当たり前のマンガの要素であるからそれを描く人々である。そうなる少年愛漫画の内容も変化し、人間関係の葛藤を描くための少年愛というより、少年愛を描くための人間関係へと変化していくのである。

以前の3大要素、肉体的な愛、拒絶される愛、パートナーとの対等の関係のうち、最後の対等な関係が抜け落ち、登場人物間の感情、セックスに「攻め」と「受け」が出現する。もう男同士だからどうのこの、女であることがどうのこのという深い思いはなくなり、ごく普通の男女間の恋愛を男同士に置き換えたと言ってもいいようなボーイズラブマンガとなる。ボーイズラブである必要、という面では「純粋な恋愛」、「感情移入するとともにヤバい場面では傍観者となれる便利さ」という初期の理由をまだ多少引きずっているからだと思われる。あるいは、己の身に引きつけずに、痛みを感じずにファンタジーとしてのセックスを楽しむために、便利な装置としての同性愛を利用して、様々な実験をしていると言ってもいいだろう。

5. 結論

以上ごくごく簡単に現在のボーイズラブに至までの少女マンガの歴史を述べた。

現在学生たちが「Yaoi」を読んでいるという場合、おそらく英語やドイツ語に翻訳されたボーイズラブの作品をさしている。日本の女性を取り巻く社会が生み出したボーイズラブが海外でも読まれている状況は、今後社会的に考察されるべき課題だろう。

日本語教育には直接の関係はないが、学生たちから「やおい」と言われた場合、上記の流れを知っておくのも無駄ではないと思われる。

参考文献

木原敏江・中島梓 1984 持堂院から巣立った仲間たち - 摩利と新吾 『美少年学入門』 新書館 218-230

柳原佳子 1987 『少女たちの夢のゆくえ - 「少女マンガ」の世界から (神戸市青少年研究シリーズ25)』 神戸市青少年問題協議会

唐沢俊一 1997 『トンデモ美少年の世界』 光文社

竹宮恵子 2001 『竹宮恵子のマンガ教室』 筑摩書房

飯沢耕太郎 2009 『戦後民主主義と少女漫画』 PHP研究所